

「人」「場所」「祭り」が舞台を蘇らせる 過疎地からの挑戦

川上光洋



昨秋、みごとに復活した法市農村舞台は、板戸を閉ざし、ひっそりと佇んでいる。祭りの賑わいとは対照的な、あまりにも静かな山里の風景に、過疎の現実へと引き戻されてしまいそうだ。まさに今、県内の多くの農村舞台が過疎という厳しい状況に直面している。過疎で沈滞化しているなかで、いったいなにができるのか。どうやって地域に風を吹き込み、住民に関心をもたせ、活動を起こすか、問題はそこにある。こうした問題に、法市

ではどのように取り組んだのか、「人」「場所」「祭り」の三つのポイントを挙げて報告したい。

人と人との繋がりが舞台をつくる

十六戸の小さな集落に沸き起こった出来事は、まるで台風のように、村内外の人々を巻き込んで勢いを強めた。中心となったのは、舞台復活を希求する村人、伝統文化をアピールしたい教育委員会、そして保存活動に燃える農村舞台の会。この三者がそれぞれの使命を胸に良好な関係で手を結んだ。とくに農村舞台の会は、プログラムづくりから舞台装置の仕込みにいたるまで、綿密にアドバイスを行いながら村人と共に汗を流して働いた。そんな手づくりの舞台に、役者も心意気で出演に応じてくれた。観客のなかには、県外から駆けつけた人もいる。その客席に心温まる手料理が振舞われた。観客も役者も村人も、一同円くなって語らい、酒を酌み交わし、踊った。農村舞台は、人々の交流を創り、共同作業を通して地域の活動をより活発にする、ひとつの仕掛けのようなもの。今後、人的ネットワークをいかに築いていくかが、舞台を長期的に活用していく鍵となるだろう。

場所の魅力を生かした舞台づくり

村人の人情も、山里の風景も、舞台をとり巻く場所の魅力が、趣深い舞台を創り出していた。なかでも野趣に溢れた太

2 0 0 3 年 秋 ・ 三 好 町 法 市 農 村 舞 台 公 演 ア ラ カ ル ト

